

ホワイトヘッドと持続性

A. N. Whitehead and Sustainability

九州産業大学 (Kyushu Sangyo University)

伊藤重行 (Shigeyuki Itow)

趙 達峰 (Zhao Da Feng)

[キーワード：ホワイトヘッド、生存、持続性、ビジネス、環境問題]

本文要約

もう既に30年間にわたって、あらゆる分野で持続性が問題にされている。最初に持続性 (Sustainability) という言葉を耳にしたのは、1976年にアメリカ建国200年祭を記念してフィラデルフィアで開催されたローマ・クラブの国際会議であった。この会議で議論された内容について、当時アメリカで発行された雑誌『TIME』に会議全体の報告と、また議論になった南北問題の解決方法として持続的発展、すなわち Sustainable Development のことが記載されていた。この時が初めて、形容詞の「持続的」の名詞形としての「持続性」が筆者にとって意識したことになった。しかし哲学的、概念的には有機体の哲学を構築したホワイトヘッドの根本概念である現実的実質 (Actual Entities) に注目せざるをえない。本論文では、さらにビジネスにおける持続性についても考察する。ビジネスはグローバル化するに伴い、地球全体の破壊に結びついてきているからである。

Abstract

The concept of sustainability has argued in all sectors for the long period of 30 years. It was the first time for the authors to know its concept when the Club of Rome International Conference for the bicentennial USA was held in 1976 at Philadelphia, the U. S. A. Overview of the conference was reported to the general public by Magazine of *TIME* in which referred to a new perspective of "sustainable development" to solve the North-South economic gap. In this occasion, the authors as participants was aware of being important of such a concept of sustainability. Alfred North Whitehead criticized Kant's concepts of "endurance" or "enduring objects" and then constructed a new concept of "actual entities" as an integral theory of everything, calling forth the Philosophy of Organism. Actual entities of his key word surely open to the current issues of survival or sustainability. After our understanding of his Philosophy, we examine to extend to a new topic of business and sustainability in this paper.

はじめに

最初に持続性 (Sustainability) という言葉を耳にしたのは、1976年にアメリカ建国200年祭を記念してフィラデルフィアで開催されたローマ・クラブの国際会議であった。この会議で議論された内容について、当時アメリカで発行された雑誌『TIME』に会議全体の報告と、また議論になった南北問題の解決方法として持続的発展、すなわち Sustainable Development のことが記載されていた。この時が初めて、形容詞の「持続的」の名詞形としての「持続性」が筆者にとって意識したことになった。今から約30年も前のことであった。約30年の時間的経過の中で、今日持続性と言う概念が人類の未来にとって重要になってきた。ホワイトヘッドは、直接的にこの持続性 (sustainability) については触れていないが、しかし彼はデカルトの「持続」 (endurance) (1)、「存続物」 (enduring objects) (2) に対して批判し、一貫した論理的検討を加えた上で、さらに「生存」 (survival) (3) に言及し、持続性が彼の現実的実質の基本概念から導出されて来るとしている。本論文では、持続性 (Sustainability) の現状と問題について究明してみよう。

1、A・N・ホワイトヘッドの持続性と生存

ホワイトヘッドは、自らの有機体の哲学にとって重要な観念として現実的実質、抱握、結合体、そして存在論的原理をあげている。この4つ観念の中で抱握を挙げた理由として、次のように述べている。すなわち、「一元的実体の宇宙論を獲得する目的を持っている私は、抱握がデカルトの精神的思惟、ならびにロックの観念を一般化したものである。それはあらゆる段階の個体的現実態に応用可能な、最も具体的な仕方の分析を表現するためである。デカルトとロックは、二元的実体の存在論を主張した。・・・デカルトは物的実体に、・・・ロックは精神的実体に・・・力点を置いた。・・・現実的諸実質は [それらが]抱握し合うゆえに含み合っている。・・・」(4)と述べている。

ホワイトヘッドのデカルトとロックの二元論批判は明らかである。ホワイトヘッドは一元論的統一を図ろうとしたのである。彼の4つの重要な観念を検討してみると、一元論的統一とは唯一絶対なる一元的究極性を求めたのではなく、現実的諸実質は相互に抱握し合った多様性と柔軟性を伴った統一であり、現代風に抱握を翻訳すると、相互依存関係にあ

りながらの統合している状態のことを指しているのである。この志向性は、私の「システム」の存在論的原理に合致している。

上記のホワイトヘッドのデカルトとロックに対する批判は、政治哲学的には近代の主権国家論批判であり、帝国主義や植民地主義批判につながるものである。存在論的には神を第一義的に創造者とする一元論批判であり、神と人間の二分割化批判である。認識論的には主体と客体の二分割化批判であり、それらの相互依存関係の強さと弱さの差異に注目する事の大事さを示唆しているのである。したがって彼の哲学は抱握、感受、共在性の概念を必要とすることになるのである。これもまた私の「システム」の概念と等価である。システムとは「一緒になってある、あるいはまとまって置いてある」という意味だからである。

二元論を批判したホワイトヘッドは、次に本論文で重要な持続性に関わるホワイトヘッドの用語の **endurance** とはどのようなことなのであろうか検討してみよう。ホワイトヘッドは、デカルトの **endurance**（「持続」）(5) の取り扱いは非常に表面的であるとして批判し、「生成のすべての働きのうちには、時間的延長をもったあるものの生成があるが、その働きそのものは、それが生成したものの延長的可分性に対応する生成の働きの前半と後半とに可分的だという意味では、延長的ではない。・・・創られたものは延長的だが、その生成の働きは延長的ではない、という説が表明されている。・・・真なる事物はその具体的満足という性格において、その時間の前半に関わる抱握と、その時間の後半に関わる抱握とに可分的である。この可分性がその延長性を構成する。しかし時空的な下位一領域とのこのような関わりは、 当の抱握の与件がその下位一領域にふさわしいパースペクティブをもって客体化された現実世界だ、ということの意味する。しかし、抱握は主体的形式を獲得する。そしてこの主体的形式は、真なる事物の心的極に属する概念的抱握との統合によってはじめて、十全に決定的なものとされる。合生は、本質的に、究極的な自己超越体としての創られたものに関わる、主体的指向によって支配されている。この主体的指向は、一つの創られたものとしてのそれ自信の自己一創造を決定するこの主体それ自信である。こうして、主体的指向はこの可分性にあずからない。もしわれわれが前半に関わる抱握に飲み注意を限るならば、それらの主体的形式は無から正規してきたのである。というのは全体に属する主体的指向は、今や排除されているからである。そのときには、主

体的形式の進展は、いかなる現実態にも関連を持ち得ないであろう。存在論的原理が侵害されている。・・・この議論を要約すれば、心的極が主体的形式を決定し、そしてこの極は、全体としての真なる事物と不可分だ、ということになる。」(6)。ホワイトヘッドの持続の考えは、明らかに心的極と物理的極の一元化であり、心身統合論にみる持続の考えであり、やはりデカルトの二元論批判である。

この *endurance* は、*survival* に連結していくのである。ホワイトヘッドは、社会を *enduring objects* とみている。そのために社会はより広い社会環境を必要とすると考え、その広い社会環境との関係性の中から安定した社会と不安定な社会が出てくると考えている(7)。敷衍するならば、国家ににおいてもどのような国家が安定し、どのような国家が不安定になり、生存できなくなるかは、その国家が国際関係的環境の中で、帝国を作り、孤立化し、不安定になるか、あるいはその逆を遂行する事によって安定化し、生存するかのどちらかである。国家の時代の持続性は、ホワイトヘッド的に言えば国際関係的環境との間での心的極の無視、私のシステム論からすれば開放的で、情報交換が次第になくなり、帝国は築いたが、結局エントロピーの増大によって帝国が生存できなくなってしまうことを意味している。ホワイトヘッドは、デカルトと違い生存とは生存している環境との関係によって保障されると考えている。次にビジネスと持続性について考察してみよう。

2、ビジネスと持続性

ホワイトヘッドの時代から世界におけるビジネスの発展は無限に拡大をしていくように見えていた。ホワイトヘッド自身がハーバード・ビジネススクールに関係していたし、ビジネスのグローバリゼーションに対して肯定的であった。まさか今日のように地球の有限性を予想していただろうか。現在ビジネスのあり方に対して持続性を持ち込まざるを得ない時代になったのである。持続的発展がより具体的になったのは、1987年「環境と開発に関する世界委員会」(通称：ブルントラント委員会)の報告書「われらの共通の未来」で、環境と開発の問題について、国際社会が達成すべき目標として「持続可能な開発」を上掲げ、「将来の世代が自らのニーズを満たす能力を損なうことなく、現代の世代のニーズを満たすような開発」と定義した(8)。

持続的発展を言い換えると、経済、社会、資源と環境保護が協調発展し、それらは1つの分けられないシステムであるということである。経済を発展させる目的を達成して、また、人類のこれによって生存する大気、淡水、海洋、土地と森林などの自然資源と環境をしっかりと保護して、将来人々は、永遠に持続的発展し、楽しく暮らすことができる。持続可能な発展と環境保護は関係があり、また同じではない。環境保護は持続的発展の重要な側面である。持続的発展の核心は発展である。しかし、厳格に人口を制御し、人の素質を高めて、環境を保護し、にもかかわらず天然資源は、永遠に利用することができる下での経済と社会の発展を行うことを求めているのである。

従来、ビジネスにおいても「企業の社会的責任」は、先進的な大企業を中心に自主的に取り組まれてきたという経緯がある。各社は自社の得意な領域、あるいは自社の事業活動との密接な関連のある領域で、それぞれ独自の取り組みを行ってきた。ところが近年、企業の自主的な取り組みだけでは満足せず、政府に積極的な施策を求める市民団体からの突き上げが激しさを増してきている。20世紀に入り人類の経済活動が飛躍的に拡大するに伴い、地球環境問題は加速度的に悪化しつつあり世界経済の発展の中で環境保護の重視は不十分である。人間活動の増大に伴って地球環境が悪化し、いろいろな問題を生じている。現在、政府間会議を主として国際的に取り上げられている地球環境問題は、次の9つの課題である。すなわち、オゾン層の破壊、地球温暖化、酸性雨、海洋汚染、砂漠化、熱帯雨林の減少、野生生物種の減少絶滅危機、開発途上国の公害、有害破棄物質の越境移動である。今後、世界で数億人が深刻な水不足や食糧エネルギーに直面するといわれる中で、いずれも人類の存亡にかかわる緊急課題といえる。先進国と途上国の貧富の差も飛躍的に拡大している。このような状況下における持続性に対する企業の取り組みとは、それらに加えて、地球環境の持続性や人権の尊重による現代文明の持続性に、企業という立場から取り組むことである。地球温暖化問題への関心が世界的に高まる中、環境保全に向けたさまざまなルール作りが進展している。企業に求められる環境対策も多様化しているが、企業側の社会的責任（CSR）の観点からも環境問題への配慮、貢献は必須ものとなってきた。環境経営と収益の二つの問題を両立させ、持続的社會を作るために、いまの企業は何をしているのであろうか。特に、企業は地球温暖化問題について、どんな対策行動をとるべきかが重要な課題である。

京都議定書で定められた削減義務は先進国全体で5.2%（1990年比）。ただし、地球規模で気候を安定させるには、世界の温室効果ガス排出を2050年までに現在の50%以下にする必要があるという。一人当たりの年間排出量が約10トン（二酸化炭素換算）という日本をはじめ、先進国はさらに大きく60-80%（1990年比）もの削減が求められる。しかも、削減目標を達成してから、大気中の二酸化炭素濃度の安定という実際の効果が表れるまでには時差が生まれるため、今すぐに取りかかることが必要である。EU（欧州連合）は、2020年までに15-30%、2050年までに60-80%の削減を目指すなど、高い目標を掲げる国・地域が次々と出てきている。日本でも先ごろ、2050年までに70%削減できるという試案が発表された。天然ガスのほか、太陽光・風力やバイオマスなどの自然エネルギーを取り入れ、石油資源に頼らないエネルギー利用を工夫し、新しい省エネ技術の導入や、エネルギー効率を改善することで、「豊かで質の高い低炭素社会」ができる可能性があるという。

ビジネスが最終的に社会にもたらす影響まで考慮することが必要となる。例えば、省エネ・省資源型の自動車や家電を開発しても、省エネ度以上のペースで売り上げが増えれば、結果として全体の環境負荷は増えてしまう。いくら個別製品の環境効率が上がっても絶対的な負荷が増えることは、人類の持続性の観点からは認められないことになる。一方、企業の立場に立てば、企業が持続的に発展しつつ、かつ自社が関与する環境負荷をトータルで減らすということは、極めてハードルが高く、そこまで企業の責任として取り組む必要はないとされてきた。しかし、持続性にコミットしている一部の先進的な企業では、絶対量での環境負荷削減という高い目標に取り組む事例がでてきている。例えば、リコーグループは、2010年長期環境目標として、リコーグループの事業活動全体における総での環境負荷を統合した「統合環境影響」の絶対値を2000年比で20%削減することを掲げている。地球温暖化を背景に持続的な投資戦略をエネルギー産業に適用ものしたものであるが、「環境・社会の高品質マネジメントを行う企業は、今後の新しい資源を基盤とした事業をうまく展開可能性が高い」としている。企業の環境問題への取り組みが活発になったといっても、その形態は企業によってさまざまである。しかし、その成果を公表して社会に評価してもらう場合には、一定の統一された基準が必要になってきた。さらに、その統一基準は、企業やビジネスの国際化の進展に伴い、国際的な基準となることが求められる。そこで生まれたのが、ISO（International Organization for Standardization 国際標準

化機構)という世界のさまざまな企画を統一する国際機関の制定した国際規格、ISO 14001である。現在ISOにおいて、環境マネジメント・監査、環境パフォーマンス評価、製品のLCA、環境ラベルなど、企業の環境保全のための有力なツールとして国際環境規格 (ISO 14000シリーズ) が制定されている。各自動車メーカーはISO 14001の認証を取得することで、より環境に配慮した効果的な体制を構築している。この様にビジネスの世界においても地球環境問題に目を向け、それらの問題をビジネスとして取り込みつつ、解決していくことによって人類の持続性、地球の持続性が保持され、ホワイトヘッドの言う生存が保障されて行くものと考えられる。

おわりに

もう既に30年間にわたって、あらゆる分野での持続性が問題にされている。この概念が現れてきた原因は、国家が自国の利益を追求するあまり、国家が自国すらも制御不能になりつつあり、新たな秩序を形成しなければならなくなったからである。もう一方ではグローバルな世界企業が各国の中央政府のコントロールを出来るだけ避け、自由に企業活動をしたく、ますます地球環境が悪化し、最終的に人類が生存できないという赤信号が見えて始めたからである。さらに戦争は環境破壊の最悪の事態を表すという認識である。持続性は、北の先進国の幾何級数的経済発展と南の後進国のますますの貧困化をどのようにして防ぎ、バランスをとるかという新語として登場してきた。地球文明は、やはり地球的一体化を推進する情報革命と、さらなる技術革新によってもたらされるであろう。この線に沿って先進国は、後進国を有機的に組み込み、新たな植民地主義に落ち込まない方策を見つけだした時に実現できるであろう。もしそうでなければ、帝国主義を脱却できなく、地球の時代は戦争の時代になり、人類の未来は暗いものとなるだろう

註と引用文献

- (1) A・N・ホワイトヘッド『過程と实在』(山本誠作訳)、松籟社、1985年、117頁。
- (2) A・N・ホワイトヘッド『過程と实在』(山本誠作訳)、松籟社、1985年、57頁。
- (3) A・N・ホワイトヘッド『過程と实在』(山本誠作訳)、松籟社、1985年、15頁。
- (4) A・N・ホワイトヘッド『過程と实在』(山本誠作訳)、松籟社、1985年、31-32。
- (5) A・N・ホワイトヘッド『過程と实在』(山本誠作訳)、松籟社、1985年、117頁。

- (6) A・N・ホワイトヘッド『過程と実在』（山本誠作訳）、松籟社、1985年、118-119頁。
- (7) A・N・ホワイトヘッド『過程と実在』（山本誠作訳）、松籟社、1985年、356頁。
- (8) 報告書「われらの共通の未来」環境と開発に関する世界委員会（ブルントラント委員会）、1987年。

参考文献

- A・N・ホワイトヘッド『過程と実在』（山本誠作訳）、松籟社、1985年。
- A・N・ホワイトヘッド『観念の冒険』（山本誠作・菱木政晴訳）、松籟社、1982年。
- 伊藤重行『システム哲学序説』勁草書房、1988年。
- 伊藤重行『日本からの新しい文明の波』勁草書房、1995年。
- 北川・伊藤『システム思考の源流と発展』九州大学出版会、1987年。
- 伊藤重行『アジアと日本の未来秩序』東信堂、2004年。
- 延原時行『地球時代のおとずれ』創言社、1995年。
- E・ラズロー『想像する真空』（野中訳）、日本文教社、1999年。
- E・ラズロー『マクロシフト』（伊藤・稲田訳）、文藝春秋、2002年。
- 伊藤重行『ホワイトヘッドの政治理論』学文社、2008年。